

---

# 魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichten

カレーパン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichte

### 【Nコード】

N0468Z

### 【作者名】

カレーパン

### 【あらすじ】

新暦65年、春。

第97管理外世界・現地名称地球に、ロストロギア古代遺産・ジュエルシードが流れ落ちる。

そこから始まるのは、少女二人の出逢いの物語。そして、少年二人の見守る先へ……。

魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichte。  
始まります。

## ブローグEins

夢。夢を見ている。

あの娘と初めて話した日。

夕焼けに赤く染まった世界で、俺は、毎日公園で涙を流している  
女の子に声を掛けた。

『……そんなことしてて、楽しいか？』

泣いている女の子に聞くことじゃない。

しかし、その時の俺は、なにを言っているものか分からなかった  
んだろう。今よりも更に口下手で、酷く人見知りしていた俺には、  
あれが精一杯だった。

それでも、あの娘は放って置けなかった。

だから、声を掛けた。

後先なんて考えず、ただ放って置きたくなかった。その小さな背  
中を、支えてあげたかったんだ……。

「……………ん」

朝の定時。

目覚まし時計が鳴る数分前に目が覚め、スイッチを切る。それと同時に、枕元に置いてある携帯がなった。

サブディスプレイには、『なのは』の文字。携帯を今年買ってもらってから、毎日、毎朝かけてくる。俺を起こしてくれようとしているんだろけど、いつも俺の方が先に起きているから、余り意味を持っていない。

それでも、俺はこの電話は嫌いじゃない。  
その考えに少し笑い、電話に出た。

「はい」

『あ、おはようございます。和貴さん』

「ああ、おはよ」

耳には、いつも通りの猫を彷彿とさせる、快活な少女の声が届く。

「今日は、ちゃんと起きてるみたいだな」

『うつ……！ 昨日のことは忘れてください……』

少しからかいながら、俺は昨日のことを思い出す。

いつも通り電話がかかってきたのはいいのだが……私は今、とても眠いです。といった感じの声だったのだ。

そんな無理しなくても、俺はいつもこの時間に起きてるんだがな。

「ん、分かった。忘れるよ」

『はい。お願いします……』

声が萎んでいるので、なのはも昨日のことを思いだして落ち込んでいるんだろう。トレードマークのツインテールが、力なく垂れ下

がっている姿が目には浮かぶ。

流石に朝からテンション激減はダメだろ。と思い、直ぐに慰める。

「なのは、安心しろ。面白かったから」

『にやつ!? 全然安心できませんよ!』

「頑張れ」

『はい! …… って、和貴さんが原因じゃないですか!』

いつも通りの朝だ。

電話を終える。これも、もう日課になってるな……。

制服に着替え剣十字のネックレスをかけ、洗面所で顔を洗う。

「……………」

顔を上げれば、自分の顔を見れる。

日本人ではあり得ない、純正の白髪。蒼と黒の虹彩異色の眼。明らかに、常人ではあり得ないものだ。

だから、俺は誤魔化し続ける。

伊達眼鏡をかけ、少し長めの前髪を眼にかける。これで、大体気付かないもので…… かれこれ一年 一人を除いて クラスメイトにはバレていない。

「しっ……………」

頬を叩き、気合を入れる。  
さあ、今日も頑張りよう。

いけだ  
池田 和貴。

私立風芽丘学園に通う、高校2年生。

勉強が少し苦手で、スポーツは平均以上には出来るくらい。

人見知り、口下手、無口、根暗。中学からの友人には、そう指摘された。

他に紹介するとなると、髪の毛は地毛だと言うことくらいだ。

他人に教えることではないが、両親とは血が繋がっていないというのも、だな……。

「おはよう、かづくん」

「……おはよう」

「ん、二人ともおはよ」

池田夫妻。

捨てられていたらしい、まだ赤ん坊の俺を拾ってくれた。心優しい人達だ。

歳的には、普通に今の俺くらいの子供が居てもいいんだけど、どうも子宝には恵まれなかったとか。ついでに、先が義母さんで後が義父さんだ。

朝食を二人で食べ、義父さんと一緒に家を出る。

「二人とも、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

「……行つて来る」

俺は学生。両親は共働きなのだが、仕事について詳しくは知らない。ただ公務員だと言う事と、よく帰つてこないということしか知らない。まあ、今頃知ろうとも思わないがな。

「……気を付けてな」

「そつちも。行つてきます」

「……ああ」

途中まで一緒に歩き、分かれて学校へ。

学校の授業をしつかり受け、昼休みには屋上で昼飯を食い、寝ながら空を見上げる。

「……………」

こうして空を見詰めていると、何故か落ち着く。  
青いキャンパスに筆を振って白い絵の具を撒き散らしたような、  
そんな空好きだ。まあ、夜の星空も好きだけど……。

「お、やっぱりここにいたか」

「ん？ なんだ、お前か」

「なんだはねえだろ……」

屋上の校舎から顔を出したのは、俺のオッドアイを知っている中学からの友人である高城だ。

いつもの笑顔を張り付け、寝っ転がっている俺の近くまで来る。

「なあ、今日放課後暇か？」

「なんで」

「合コン。お前もどうだよ」

「いい。興味ない」

何を言うかと思えば、俺が絶対に行かないようなことを聞いた。理由は大したことない。

ただ、今日は両親二人とも帰ってこないと聞いてるから、家のこととを俺がしないといけないからだ。

「相変わらず付き合いわりいのな」

「ほっとけ……」

そう言って、俺は高城に背を向けるようにごろりと横を向く。

言われなくても、付き合い悪いのは自覚している。でも、家のことは俺がしっかりしないとだし、なにより大勢で何かするっていうのは苦手だ。

「じゃあ、俺の用事はこんだけだから。あばよく、池田つつあゝん」

「俺は、とつつあん役をやればいいのか？」

「……そこはそのままノツてくれよ」

「お、わりい……」



ノリの悪さも、分かってる……。

「たく……。じゃな」

「おう」

高城は戻るようなので、軽く手を挙げて送り出す。

校舎に続く扉が閉じたのを確認し、軽く溜め息を吐く。

「……やっぱ疲れる」

高城と話すのが、ではなく。話すこと自体が疲れる。

とことん、俺は人付き合いがダメなようだ。

まだ昼休みの時間は残っているので、伊達眼鏡を外して目を閉じる。春の暖かな風が、俺の頬を撫でていった。

寝過ごした俺は、見事に午後の授業はサボることになってしまった。

やっちまった……。

「……………ま、いつか」

伊達眼鏡をかけて教室に戻り、鞆を持って帰ることにした。

やっちまったことは、考えても仕様がなない。さっさと帰ろう。

「それはどうなんですか？」

「仕方なかったんだ。昼寝は、どうも普通に寝るのは違った誘惑がだな」

「それでも……ダメですよ」

下校の途中。知り合いとあった。

高町なのは。

今朝の電話の主で、私立小学校に通う小学3年生だ。

この子と会ったのは、いつだろうか……。確か、俺がまだ小学生の時だったかな。

小学生のくせに、変に落ち着きがあるし聞き分けはいいしで……まあ、付き合う方としては有り難いんだけど。もっと子供らしくしてもいいと思うんだけどな。

「どうかしたんですか？」

「いや、どうもしない」

俺が顔を見ていたのに気付いたようで、小首を傾げてこちらを見ってくる。別に言う事でもないの、適当に誤魔化しておく。

「和貴さんは……」

「ん」

「和貴さんは、将来何になりたいって言うのは、決まってますか？」

不意に聞かれたその質問。また何か悩んでるのか？

なのはの悩みは、小学生が考えるには早すぎることだと思う。たぶん、授業とか友達の影響なんじゃないかと、思う。

答えてやりたい。でも、俺にはこの子が望む答えは持ち合わせて

いない。

「決まってない、お先真っ暗だ」

「そう、ですか……」

これは、直ぐに解決なんてできないことだ。  
ゆっくりと解いていけばいいことだ。まあ、俺も手伝えることは  
手伝おう。

「お、たいやき食おう。たいやき」

「え？」

「ほらほら、行くぞ」

「あわわ！」

いつまでも同じこと考えていても仕方ないので、無理矢理話を変  
えて、有無を言わず手をとって引っ張っていく。

こんな事でもしなければ話を変えられない自分に気持ちが落ち込  
む……。

「498……499……500……っ！」

帰宅後。干してある洗濯物を取り込み、夕飯を食べた後、毎日の  
日課である竹刀の素振りをしていた。

毎日500回。

どうしても出来ない時 風邪ひいたりしなければ、約10年毎

日欠かさず行っている。

ふう……と、熱くなつた息を吐き、窓辺に座る。

俺が素振りをやるようになったのは、剣道を始めたからだ。まあ、今では部活はせずに素振りをしてるだけになっているけどな。

「……今日は綺麗だな」

窓辺で空を見上げれば、夜空には星が瞬いている。

ここでもそれなりに綺麗なのだから、違う所に行けば、もっと綺麗な夜空も見れるんだろう。……それを見たいが、やはり面倒なのでこの夜空が一番か……。

この夜、俺が知らないところでは、魔法の種が蒔かれた。  
ジュエルシード。

俺がその存在を知るのは、もっと後になる。

ブローグEins（後書き）

次回『ブローグZwei』

天は輝き、全てを照らす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0468z/>

---

魔法少女リリカルなのは Zwei Geschichten

2011年12月1日22時52分発行